

---

# 恋愛病棟

ミナ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

恋愛病棟

### 【Nコード】

N4874BA

### 【作者名】

ミナ

### 【あらすじ】

仲野医院での勤務者は、今日も恋に院内感染中…（笑）。お題に沿った読み切り短編集。「身体の部位で10のお題」使用。お題配付元：負け戦様（<http://makeikusa.fc2web.com/>）

## 大きなてのひら（内科看護師・白井の場合）

仕事を終えた木曜日のロッカールーム。

着替え終えて、約束の20時までまだ少しあるからとぼんやりしている、誰かが入ってきた。

足音からするとふたりくらいだが、ロッカーを隔てた向こうで止まったため、誰かはわからない。

「あーもう、ほんと苛々する」

「ね、年下の癖に何様よって」

その声を聞いて、白井（しろい）は一気に気が滅入るのを感じた。

彼女たちは、今年他の病院から移ってきた看護師たちで、白井よりも年上だがこの病院では後輩に当たる。

白井は今日たまたま、目に付いたところをついちょっと言ってしまうのだ。

ロッカールームに他には誰もいないと思っっているらしい彼女たちの、白井についての陰口が大きな声で続いていく。

白井は自分の性格がきついことは自覚している。

言葉がきついせいで、医師たちにさえびくびくされることがあることもわかってる。

けれどほとんどの人は、冗談めかして「怖い」なんて言いながら流していたし、たまの悪意も直接向けられてきた。

こんな風に陰口を叩かれるのには慣れていないせいか、白井の気持ちにはどんどんささくれだつてくる。

携帯を見ると、時刻は19時46分。

まだ少し早いけれど、もうここにはいたくない。

バッグを抱えて立ち上がり、彼女たちの脇を通り抜けて行く。

「お疲れ様です。お先に失礼します」

視野の隅に入った真丸に見開かれたふたりの目と固まった口がおか

しくて、だがそれでも気分はちつとも晴れなかった。

約束の10分前に到着したのは、リハビリ室だ。

看護師というのは意外と体力のいる仕事で、ある時患者を載せたストレッチャを動かしていたら腰を傷めた。

ついでに、元々首の骨にも異常があるせいで体のバランスが悪く、定期的になりハビリが必要だと診断された。

最初にかかったときからずっとリハビリをしてくれているのは、PTの古賀（こが）だ。

古賀は実際には白井より4つ年上だが、童顔のせいで同じ年くらいに見える。

すっかり仲良くなった今は、時間内に来るのが難しい白井のため、週に一度全ての患者が捌けた後特別に時間外でリハビリをしてくれている。

数人のクランクがいる受付を会釈で通り抜け、部屋の入口に置いてある椅子に勝手に座ると、最後の患者を看ているPTたちが目に入る。

その中に、約束しているはずの古賀の姿が見えず、白井は首を傾げた。

「お待たせ」

後ろからかかった声に驚いて見上げると、古賀だった。

軽く手を上げている古賀にどきりとさせられ、白井はいつもよりもさらにぶっきらぼうな物言いで返してしまふ。

「まだ時間じゃないけど」

「ああ、最後キャンセル入ったから。少し早いけど、もう見てやるよ」

白井の言い方にまるで頼着せずに言いながら、古賀の掌が白井の背中にあてられて促される。

古賀にはいつも何をどんなふうにも言っても敵わない、と知っている白井はその掌に素直に従って立ち上がった。

首周りに軽いマッサージを丁寧に施された後には、患者やスタッフはいなくなっていた。

しんとしたりハビリ室に、呼吸の音と衣ずれの音、白井が横になっているベッドや古賀が座る椅子の軋む音だけが響く。

今は左の肩から腕にかけて調節している古賀を、見上げてみる。

意外と顔が近い、などと思っていると、視線に気づいた古賀が少しだけ眉を顰めた。

「今日、何かあったか？」

「どうして」

「…皺。さつきからずっと。体もいつもよりなんか強張ってるし」腕からいったん離れた古賀の掌が額に触れ、その親指が眉間に触れた。

その適度な重みと温もりに、ささくれだっていた気持ちが少しずつ解けていく気がする。

きつい性格だと自他ともに認めている白井も、なぜか古賀の前ではそれを維持できず、普段なら嫌悪するはずの甘えまで出てしまう。

多分、古賀を好きだと思っその気持ちがそうさせているのだ。

「今日、やなことあって」

「ん」

ぼつぼつと話しだすと、古賀は額から手を離し、白井の話聞きながら施術を再開した。

古賀は、掌が大きくて温かい。

冷え症の白井からするとかなり羨ましく、患者としてはかなり安心するが、古賀を好きだと思っ女としては少し怖い。

リラックスモードにさせられて油断しているときに、時折絶妙なタイミングとタッチで刺激される。

古賀はそんなこと意識しているはずは無いし、自意識過剰だとわかっているのだが、こればかりはどうにもならない。

いつの間にかベッドに乗って膝を立てた古賀の腿に、仰向けの白井の脚が載せられ、古賀の掌が白井の太腿に触れた。そのまま体重を乗せるようにぐっと古賀が体を少し倒すと、微妙に密着度が増す。

もう少し角度を変えれば、この体勢はまるでセックスのようで。意識しないようにと思えば思うほど、逆に意識してしまう羽目に陥る。

そうなってしまうと、古賀の掌はもうPTのものではなく、男のそれだと錯覚させられる。

早く離れて、早くその手を離して。

頭の中で念じながら、意識を逸らそうと話を続けてみるが、効果は上がらない。

「それ、で…っ」

どう考えても不自然になってしまった話し方に、焦って古賀を見上げたが、古賀の様子は変わらない。

そのことに安堵しつつも、次々に襲ってくるぞくぞくとした感覚に必死に抗うが、話すと変な声が出そうで唇を噛む。

「ん、それで？」

古賀は相変わらず密着した体勢のまま、掌で無遠慮に太腿から爪先まで触れながら尋ねる。

その瞬間、いつもの手順から外れている、と白井の頭の隅で疑問が沸き上がった。

いつもなら、こうして股関節の調節を図った後は、すぐに離れてその後足先のほうに触れるのだ。

おかしい、と思いつつも、古賀の掌から逃れることはできない。

「肋骨もずれてるんだよな…」

「え？」

無防備だった脇腹から肋骨の上に、古賀のもう片方の掌が滑り、白井は無意識に体をびくりと小さく跳ねさせた。

ずれていると言った割に、その掌には調節を図ろうとする力は働い

ていないような気がする。

ただ柔らかに触れられる掌の意図がわからず、古賀を見上げるが読み取れない。

「ねえ、ちよつと何…っああ」

肋骨に沿って撫であげられ、堪え切れずに上げてしまった自分でもマズイと思ったその声に、古賀の掌がぴたりと止まる。

白井は、両手で口元を押さえつけつつ古賀を睨みつけたが、その目にいつものきつさと力は無い。

白井を見る古賀は、笑みを浮かべるように口角を上げている。

「…いい声」

「ち、違っし！ 今のは、べつにそんなんじゃない」

焦って言い訳すればするほど情けなくなり、しかもそんな白井を見て古賀は笑っているしで、白井の焦りはより増す。

古賀の掌は、動いてはいないがまだ触れたままにされていて、それも気がでない。

「とにかく！ 忘れよう。うん、忘れて！」

「無理だろ」

「はあ？ …っ」

言おうとした文句は、また動き出した掌に中断させられた。

確実に、リハビリじゃない。

明らかに、快感を引き出そうとしている動き。

「何考えてんのっ？」

「何って、そーゆう声聞いてみたくなつた」

「っなにそれ」

何を考えているのかさっぱりわからない古賀に、白井の頭の中は少しずつ冷えて行く。

好きな相手に触られて気持ち良くない人はいないだろうが、それでもわけも分からず触れられるのは気分が悪い。

せっかく治まっていた苛々が、またぶり返してきた。

白井は、頭を載せていた枕を掴むと、思いっきり古賀に向かって投

げつけてやる。

「イテっ」

「帰る!!!」

靴を履いている時間も惜しく、バッグと靴を手に持つと裸足のまま走りだす。

後ろから焦ったように名前を呼ぶ古賀の声が聞こえてきたが、無視してエレベータに駆けこんだ。

階数ボタンと閉ボタンを意味もなく連打して、ようやくドアが閉まると白井は力が抜けたように床にへたり込んだ。

「何だったの……」

のろのろと靴を履きながら、ぼんやりと先ほどのことを思い出して身震いする。

今日の古賀は、どこかおかしかった。

けれど、多分意識してしまったのは自分が先なのだ。そうすると、それに気づいた古賀が誘発されたのか。

ということは、もしかしてからかわれたのか。

「…最低」

まだ残っている古賀の掌の感触を振り払うように、白井は自分の掌で体中を擦る。

それでも消えない感触と熱さが手に負えず、深くため息をついた。

それからの一週間、白井は何かか抜け落ちたかのように過ごした。

言葉も表情も無くなり、必要以上に仕事を引き受けたりと、普段の白井からは考えられない様子だった。

単に古賀とのことを考え込んでいただけなのだが、周りからはかなり落ち込んでいるように見えたらしい。

先週陰口を叩いていたふたりに、どうやら見当違いの反省をされてしまったらしいことが、少しだけ笑えた。

「白井さん、残業ですよね？ 私たちやりますって」

「でもこれだけ」

「でももう8時半になりますよ?」

時間はわかっている。

いつものリハビリの時間はとうに過ぎていくけれど、行くかどうかどうしようか結局踏ん切りがつかなかったのだ。

「ていうか、今日はデートなんじゃないんですか?」

「は?」

藪から棒に尋ねられたが、彼氏もないのになぜにデートなのだ、と思わず顔を上げて後輩を見つめる。

問いかける視線の意味がわからないのか、後輩たちは顔を見合わせ、不思議そうに見つめ返してくる。

「あれ、違うんですか?」

「毎週木曜は早く帰ってるじゃないですかあ」

「白井さん嬉しそうにしてたし、デートだと思ってたんですけど…」  
何を言われているのか理解すると、恥ずかしさでカツと顔が熱くなつた。

白井は自分がリハビリに通っていることを、特に同僚たちには伝えていなかったが、デートだと思われるほど浮かれていたということか。

つまり、それだけ古賀に会えるのを楽しみにしていたという事実が白井に突きつけられる。

「あ、赤くなつた…やっぱりデートなんですね!」

「それならやっぱりこれは私たちがやるんで!」

「お疲れさまでしたあ」

仕事を無理矢理奪われて、追い立てられるようにステーションを後にした。

ロッカールームに向かう廊下をゆっくりと歩きながら、だんだんと覚悟を決めていく。

会ったら、先週のことを問い質して、それからできたら気持ちを伝えてみよう。

そう決めてしまえば、あとは急ぐだけだ。

遅れた時間を挽回しようと、白井は人気のない廊下を急いで走った。

リハビリ室の電気は点いていた。

遠目に灯りを見てほっとした白井は、だが部屋に足を踏み入れた途端少なからずがっかりした。

残っていたのは、古賀ではなかった。

「森（もり）PT……」

「あ、白井さん。古賀PTから伝言なんですけど」

「伝言？」

「無理なら僕にしろ、って……僕は意味わかんないんですけど、言え  
ばわかるからって、わかります？」

嫌なら担当を替えてもらえ、ということだろう。

古賀も古賀なりに気にしてはいるらしい、ということはあるが、  
こういうのは狡い。

思わずむっとした白井の表情に、森は傍目にわかるほどびくりとし  
た。

「古賀PTって、まだいますよね？」

「あ、はい。呼んできます？」

「お願いします」

早く古賀を呼んだ方が安全だと思ったらしい森は、軽く会釈をする  
とそそくさと部屋を出て行った。

誰もいないリハビリ室で、手持無沙汰になった白井は、いつも使っ  
ているベッドまで勝手に歩いていく。

ベッドを見ると先週のことかまた頭の中に鮮明に浮かび上がり、そ  
のせいで熱くなった頬を手で押さえる。

聞きたいことはたくさんあるのだ。

落ち着つこう、と言い聞かせ、ベッドに腰掛けた。

ぎゅ、という靴底と床の接する音が、一定間隔で聞こえだんだんと

近づいてくる。

音が止まると同時に、床を見つめていた白井の視界に、古賀の履くスニーカーが飛び込んだ。

見上げると、どこか情けないような表情の古賀が白井を見つめている。

その顔を見た瞬間、聞きたいと思っていたたくさんの言葉たちは、頭から飛んで行ってしまった。

その代わり、できたら言おう、なんて狡い考えでいた言葉が頭の中を埋め尽くす。

「……すぎ」

「ごめん！」

ほぼ同時にそれぞれの口から出た言葉は、古賀と白井の双方を困惑させた。

特に白井としては、告白した瞬間にしかも勢いよく謝られたということ、衝撃は地味に大きかった。

一拍置いて白井の言葉を理解した古賀は、脱力したように笑って、近くから引き寄せた椅子に白井と向き合う形で座り込んだ。

「白井は、嘘つかないよな」

「なに、どういう」

「俺が好きって、ほんとだよな」

「今謝ってたじゃん。確認する意味がわかんない」

「俺が謝ったのは先週のことじゃん。つか、俺も白井が好きなんですけど、だからもう一回確認してもいいですか」

馬鹿丁寧に聞いてくる古賀に、白井はようやく状況を理解すると、今度は一気に恥ずかしさが襲う。

照れ隠しのように、聞こえろと思うていた言葉を必死で思い出して矢継ぎ早に質問を浴びせる。

「先週の、どういうこと。なんであんなことしたの。今日も逃げるし、何」

「…それは、ごめんって。ちょっと、抑え利かなくて暴走した」

「暴走つて」

「やー、つまり、好きな女に仕事とはいえ触れちゃうつてのは実にオイシイ話なわけですよ。

ただ先週はいつもよりイタズラが過ぎました。すいませんでした。でも言い訳するとあん時の白井の顔も犯罪レベルだったんだよな」  
丁寧な言葉遣いの割に、内容についてはあんまりな言い草で、白井は目を白黒させる。

しかも、古賀の言い分には聞き捨てならない言葉があった。

「…いつもより？」

ということは、たまに感じていたのは、自意識過剰ではなかったということだ。

それでしかも一生懸命我慢していた白井の顔を、素知らぬ顔で実はしっかりと観察していたということか。

こんなに童顔の癖に、仕事一体何考えているんだ、と古賀をきつく睨め付ける。

「サイテーだよ。エロPT」

「エロつて」

ボキャブラリの乏しさを露呈する物言いに、古賀はくっと思を詰めて笑った。

「白井限定なんだけど」

「…なら許す」

「じゃー、そろそろやるか」

「リハビリだからね。先週も途中だったんだから、今日はちゃんとしてよね」

「はいはい」

古賀は苦笑いしながら掌を肩に当てて、白井を一度立ち上がらせる。バランスを確かめるように体中を優しく触れるその掌に、安堵した白井は小さくほほ笑んだ。

“ちゃんと”リハビリを施す古賀に、白井もつられてリラックスモ

ードに入る。

痛くない程度のちょうどいい強さで触れられ、体から余計な力や強張りが見えなくて、と抜けて行くのがわかる。

「…きもちいい」

うつとりとした心地で思わず呟くと、古賀の手が止まった。

止めないでよ、と文句を言ってやるうと目を開けると、何とも言えない表情が目の前にある。

「何が？」

「そのふにゃふにゃになった顔と声で、そういうこと言っつものやめてくれる」

「何が？」

「…白井の方がよっぽどエロいんだよ」

眉を顰めてぼそりと呟かれたのは、そんな言葉で。

何言っつてるんだ、と頭に血が上がり、思いつく限りの雑言罵言が口を衝きそうになる。

その一瞬前に古賀の唇で軽く塞がれて、汚い言葉は日の目を見ずに済んだ。

「…ちゃんと、するって」

「キスだけだろー」

「そ、れでもっ」

意識しだすともうダメなのだから、これだけでも困る。

「はいはいはい」

「真面目にっ」

「わーかったって。っーか、白井ほんとかわいいな」

「他に誰もそんなこと言わないし」

「俺の前でだけキバ抜けるのがいいーんだよ」

「…モノズキ」

何と言っつて返せば良いのかもわからなくなってそれだけ言えば、古賀の大きな掌が頭を撫でた。

その気持ちよさに、また目を瞑る。

いくら憎まれ口を叩いても、結局、この掌には逆らえないのだ。

大きなてのひら（内科看護師・白井の場合）（後書き）

トップバッターは、内科の看護師、白井です。

HSHで直輝を冷たく突き放していた彼女です^^;

口は悪いけれど、好きなひとの前ではかわいくなってしまう、普通の女の子でした。

## 真っ直ぐな瞳（整形外科PT・森の場合）

視線には敏感なほうだ。

と言ってもそれは、基本的に人づきあいが得意ではない森（もり）の、単なる危険回避のためのある意味本能的センサーである。

例えば媚びてくる視線だとか、あるいは逆に哀れまれているような視線を感じるとする。

さらにそれが、目が合いそうになるとすつと逸らされるような類いのものだったとする。

迂闊に立ち入らせないように、そして深入りしないように注意深く接するようになるから、大きな波が立たない。

そこそこに心を閉じていることが、静かに生活するうえでは必要なのだ、と森は思っている。

けれど、最近感じる視線には少し困っていたりする。なんとというか、痛いのだ。

最初の頃は、もう少し遠慮がちだったような気がするのだが、今はもう遠慮など欠片も感じられなくらいに見られている。

それも単に見られているというよりも、観察されているといったほうが正しいと思えるような視線なのである。

ああ、今日も視線でチクチク背中が痛い、と思いながら、珍しく入った患者の治療に励む。

自分で珍しいと言いきってしまったというのは哀しいことだが、事実、森の患者は少ない。

入るのは、他のPTの予約がいっぱいで入れずに森に流れてきた患者か、新規の患者だけである。

この病院に来て日が浅く、患者の覚えもよろしくないがためなのだが、ローテーションに入ってはいるものの、今のところクランクに毛が生えた程度の存在だ。

クラーク、という単語を思い浮かべたせいで、なんとなく背中に刺さる痛みが増したような気がした。

視線の元が、山下（やました）というクラークだからである。

これだけ見られていれば、森でなくとも気づくだらう、というほどの視線の主だ。

いつから感じているのかといえば、恐らく森がこの病院に来た時からずっとだと思う。

それは自意識過剰でも何でもなく、紛れもない事実だ。

けれども、その視線に含まれているであろう感情を、森は未だに読み取ることができずにいる。

それさえわかれば接し方に工夫もできようが、わからなければ対応策も練れやしない。

患者と接するより受付にいたことのほうがまだ多い森としては、ただでさえ居心地の悪いリハビリ室が、山下の存在とその視線によってさらに居心地悪く感じる。

治療を終えた患者と共に受付のほうへ向かおうとすると、山下の視線を正面からもろに食らうことになった。

じつとこちらを見つめている瞳とぶつかり、森は何とも言えない気分陥らされる。

視線を逸らすのは、今まではいつだって相手のほうだったのに、山下は決して自分から逸らそうとしない。

耐えきれずに逸らすのは、山下に限ってはいつも森のほうになってしまった。

どこか敗北感に似たような感覚を味わいながら視線を逸らし、患者の次の予約を取ることにする。

「次はいつ頃来られそうですか？」

「来週の同じ頃の間でお願ひします」

「ええと、それだと古賀先生はまた予約埋まってしまってますよ。

来週だと…朝一番か午後一番だったら」

「いえいえ、古賀先生でなくていいのよ。今度から森先生にお願いしようかしらと思って」

「え…」

思いがけない言葉に、森は驚いて一瞬動きを止めた。

古賀の治療は丁寧で親切、且つ的確であるため評判が良く、古賀の治療の予約を取ろうとする患者は多い。

そして一度古賀の治療を受けた患者は、なかなか古賀以外のPTの治療を受けたがらないのだ。

「ずっと古賀先生だったけど、先生もすごく丁寧にしてくださいませんか」

「あ、ありがとうございます。じゃあ、来週と同じ時間で予約入れますね」

まだまだ古賀のレベルには到底追いついていないことは自分でもわかってはいるが、それでも少しは認めてもらえたのだと思うと嬉しい。患者を見送った後、森は思わず小さく拳を握った。

「よかったですね」

横から、一部始終を見ていたらしい山下の声がして、森ははっと顔を向ける。

相変わらず瞳に映る感情は読み切れないが、山下は笑顔だった。

「森PTがいつも一生懸命患者さんに接してるの、ちゃんと皆さんわかってくれてますよ」

それは山下が、いつもあの痛いと感じるくらいの視線で観察しているからわかることなのか。

と一瞬思わないでもなかったが、それはそれとして、山下の言葉は森の嬉しさに拍車をかけた。

山下に限らず、普段ほとんど誰かと親しくしない森だからこそ、他者からそんな風に思われていたことはかなり嬉しかった。

「ありがとうございます」

思わず緩んでしまったままの顔で言うと、山下は驚いたように瞠目した。

その理由を聞こうと思ったところで、受付に数人の患者が来てしまい、山下はぱつとその患者たちに向き直る。そして森も、物療を受ける患者の対応に追われ出し、結局聞き出すことができなかった。

夕方からは仕事帰りに物療を受けに来る患者がかなり多くなる。

機器には数の限りがあるし、一つの機器につき一人十分という制限があるにはあるが、それでも人数が多ければ時間内には捌ききれないことも多い。

既に診察終了時間を過ぎていたが、赤外線とけん引とウォーターベツドの所にまだ患者が残っている。

予約患者を全て捌ききつたらしい先輩PTたちは、既にリハビリ室から出て行った。

森はここでは一番新人だから、そのことについては特に何とも思わないし、むしろ当然だと思っている。

ただ、クラークの中で同じく一番新人の山下も最後まで残っているから、それが気にかかるだけだ。

既に空いているベツドや機器の整頓が終わると、待っていること以外にやる事が無く、受付にふたりでいることになる。

森は人と話すのは基本的に苦手だし、森の想像というか予想だが山下もそれほどお喋りというわけではない。

どうしても沈黙が支配しがちになってしまう、その時間が困るのである。

ウォーターベツドのアラームを皮切りに、残り二つの機器も次々にアラームを鳴らし、沈黙と困惑の時間は終了した。

森と山下は慌しく機器を片づけ、会計用のカルテを患者に渡さなければならぬ。

最後の患者のカルテを取ろうと森が目も向けずに手を伸ばすと、取ってくれようとしていたらしい山下の手に重なってしまった。

掌に伝わってきた滑らかさと柔らかさに驚き、森は思わずその手に、そして山下の顔に視線を遣る。

山下の瞳は、いつも通り真っ直ぐ森に向かっていた。

だがその瞳に、常がない、揺らめくものを見つけた森は、動揺して奪い取るように山下の手からカルテを取る。

「お大事に」

かろうじて、患者にその言葉を言えたことを自分で褒めてやりたい。そう思うほどに、森は狼狽えていた。

患者が出て行き、自動ドアが閉まり、リハビリ室には森と山下だけになった。

その事実を認識すると、森はゆっくりと山下へ向き直る。

視線は、まだ森を捉えたままだ。

というよりも、決して逸らすまいと無理をして踏ん張っている、という感じだった。

その意味を、気づかないほど鈍感ではない。

しかし、今まで気づけなかった事実を考えると、視線のセンサはあまり大した性能ではなかったらしい。

今まで、痛いほどの視線を感じていたが、今向けられている視線には、別の意味で射殺されそうだった。

本物の好意という一番厄介な種類の視線を、無視できなくなる時まで感知できなかったなど、センサとしては致命的ではないか。

そう思いながら小さく笑うと、山下がまた目を瞞ったように森を見つめる。

そういえば、今日の昼間も何か驚いていたな、と思い出した。

「何を、そんなに驚いてるんです？」

「わ、笑ったから」

「驚くことですか、それって」

「驚きますよ。普段全然笑わないし、

ここに来て初めてじゃないですか。すごく久しぶりに見…あっ」

慌てて口元を押さえた山下を、森は不思議そうに見る。

「すぐく久しぶり、と言われても、山下とはこの病院に来て初めて会ったはずなのだが。」

問いかけるように見つめた先の、相変わらず健気にもじつと森を見つめている瞳は、それでもかなりぐらぐらと揺れていた。

「……去年の冬、森PTが面接に来てたときに、見たんです。」

お年寄りの方が若い人とぶつかって倒れそうになって、

あつて思ってたなら、森PTが支えてあげてて。

それで、お礼を言われた時に、すごく優しい笑顔で、

しかもその後荷物も持ってあげて一緒にエレベータに乗ってあげてました」

言われて面接日のことをぼんやりと思い出したが、そんなこと今まですっかり忘れていた。

妙なところを見られたものだ、と少し気恥ずかしい気分になる。

「だから、受かるといいなって思ってた、実際ここに来たときは嬉しかったのに。」

なんか、深入りさせないってオーラがすごいし。

お近づきになりたい視線をちらつと送ってた人たちは、

さつさとかわされてるのにだんだん気づいて。だから……」

そこまで言つて、山下はその先を言い淀んだが、森は納得した。だから、あの痛いくらいの視線だったのだ。

少し見てかわされるより、むしろ見続けて逸らさないでいればいつかは見てくれる、と思つたのだろう。

「…負けました」

ここまでわかつた以上、無視できないし、またそうしたいという気持ちも湧かなかつた。

それに、どうせこんな強い視線をくれるなら、いつものじゃなく、感情を映し出した今みたいな瞳のほうがいい。

森のあっさりとした敗北宣言に、山下は嬉しそうに笑った。

じつと、森だけを、真っ直ぐに見詰める瞳。

ぐらぐらと揺れているように見えるのは、今まで隠していた気持ちを曝け出しているからだ。

見つめ返すと、腰骨の辺りからざわざわとしたものが駆け昇る。

その瞳に、触れたい。

こんな気持ちになったことは、今まで誰にも、一度として無かったのだが、その欲求のあまりの強さに森は抗えなかった。

まず最初に、瞼に、睫毛に、目の縁に、慎重に唇を寄せる。

そして、そっと出した舌の先を、眼球へ這わせた。

「ひゃ…っ」

途端に、山下はよくわからない声を上げて、体をびくつかせた。

異物を押し出そうと瞼が閉じようとするが、森はそのまま瞼の隙間に舌先を留まらせている。

驚かせたか、怖がらせたか、けれど山下は森を止めさせようとはせず、ぎゅっと森の服を掴むだけにとどまった。

その仕草に許可を得たような気がして、森はそのまま続行する。

眼球を舐める、というのは、どこか倒錯的な気もした。

まともな神経なら、決して舐めたいと思わないような部位だろう、と頭の中のまだ少し冷静な部分で考える。

べつに、美味いわけでも甘いわけでもない。

ただ、森を見つめ続けてくるその真っ直ぐな瞳が愛しいだけなのだ。右の眼を堪能した後、森はそのまま左へと移る。

山下はやはり抵抗せずに、目を閉じようともしない。

その代わり、少しだけぬるつくような感触の真ん丸ではない表面に舌を押しつけると、森に継る手の力が強まる。

「は、あ…っ」

息を詰まらせるような、声にならない声を上げる山下に、煽られる。舐める、というより既に、しゃぶるという言葉がふさわしいかもしれなかった。

内線の鳴る音が、大きく鳴り響く。

一気に現実に戻された森と山下は、ぱつと体を離した。

まだ震える体を持って余し、森から手の離せない山下を椅子に座らせ、森は受話器を取り上げる。

「リハビリ室、森です」

「森PT！ もう消灯になっちゃうんですけど、まだですか？」

「え？ あ、高木（たかぎ）さん？」

「え、じゃないですよ！ 8時半からって言ってたじゃないですか」  
内線の相手は、整形外科の病棟看護師だった。

入院中の小学生のリハビリを頼まれていたのだが、すっかり忘れていた。

中学生以下の患者の消灯時間は9時に設定されており、時計を見ると、もうあと3分後に迫っている。

謝り倒し、今から行くと言つと、内線はすぐに切れた。

言ったからには行かなければならないのだが、山下のことを思うとすぐには行けない。

座ったままの山下に視線を落とすと、濡れた瞳が森に向けられる。

舐め倒していたせいか、と思うと今更ながらなんとなく罪悪感が襲ってくる。

「すみません」

「え？ な、何がですか」

「や、なんか…」

言い淀んだ森だったが、山下はなんとなく察したらしく、少しだけ顔を赤らめたまま笑った。

「いいです。それに、ちょっとだけ、クセになりそうな感じでした」  
小さな声で言われた言葉に、森は思わずまじまじと山下を見つめる。  
恥ずかしそうだったが、それでも瞳を逸らさない山下に、森は軽く調子に乗ってみた。

「じゃあ、またしてもいいですか」

「……敬語、やめてくれたら」

「いいの？」

「早っ」

変わり身の早さに、ふたりして噴き出して笑った。

ひとしきり笑い合い、はっとして時計に目を向けると、9時を回っている。

「わわっ、時間無い！　ここは私やりますから、行ってあげて下さい」

「……敬語、やめてくれたら」

「え？　あ、そっか。……行って？」

山下の物言いは、どこか微妙な感じがしたが、なんとなくお互い照れてしまった。

「じゃあ、よろしく」

山下の目尻に軽く唇を寄せてから、森は歩き出す。

その背中には、また視線。

痛いような、熱いような、全力のそれに、歩きながら森は小さくほほ笑んだ。

この真っ直ぐな瞳は、案外癖になる。

**真っ直ぐな瞳（整形外科PT・森の場合）（後書き）**

今気づきましたが。

目玉は舐めたのに、普通のキスはしてなかった…。

どこまで眼球好きなんだ、森ー！><

というわけで、森はちよっぴり変態チツクな男でした（笑）。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4874ba/>

---

恋愛病棟

2012年1月14日14時50分発行